

# ひろげる（伸張・伸長）～わくわく登校 納得の下校～

## ◎5歳児と小学校1年生をつなぐ【架け橋期】の認識をもつ

5歳児から小学校1年生までの2年間は、「架け橋期」と呼ばれています。なぜ、この2年間でしっかりとつないでいこうとしているかというと、幼稚園、保育園等での【遊び】を中心とした環境から小学校での【学習】を中心とした環境に変わる、その際にギャップを感じて学校に行きたがらない現象、つまり、『小1ギャップ』『小1プロブレム』が引き起こるからです。この1年で、次年度本校に入学してくる園所と交流活動を行ってきました。例えば、隣の清里保育園さんとは、学校園での「サツマイモ交流」、生活科での「子どもまつり」での交流、「凧あげ交流」、そして、本で行った「体験入学交流」です。交流を重ねるごとに子供は勿論のこと教師同士の交流も高まってきて、校種の枠がなくなってきています。



凧あげ交流の様子

今の時期は、次年度に向けての「架け橋期のカリキュラムづくり」を行っているところです。しかしながら、やろうとしていることが、本当にあっているのかその判断や基準が曖昧でした。そこで、カリキュラム改善が確かなものになるように、専門家を1月21日（水）に招聘し、「清里小学校幼・保、小連携会議」を開催しました。今回は、幼・保、小、行政の方とのワークショップを前半に、後半には架け橋期プログラムの実践に精通されている尚絅大学こども教育学部こども教育学科准教授の増田 吹子先生を講師にお招きし、ご講演をいただきました。



ワークショップの様子



増田 吹子 先生による講話の様子

ワークショップでは、生活科の教科書を確認し、小学校で行った「学校探検」の内実を聞いたうえで、意見交換を行いました。

講演では、増田先生が関わられた、島根県津和野町の実践をもとに、以下のご意見をいただきました。

- ・まずは、関わる【大人の目線合わせ】の必要性。
- ・交流は必要だが、交流＝連携というだけではなく、それ以外にも得るものがたくさんある。
- ・5歳児と小学校1年生のハードルは低くはしなければならないが、フラットにすることではない。子供自らが乗り越えていけるような高さで活動させていくことが大切。

このような意見を基に、今後、「架け橋期」の在り方を職員全員で模索しながら進めていきます。

## ◎5年生総合的な学習の時間「高齢者との交流」

5年生の総合的な学習の時間では、福祉についての学習を行ってきました。特に高齢化社会について学んだ子供たちは、地域の高齢者との交流をやってみたいと考えるようになりました。

子供たちが考えた交流の内容は、『昔遊び』でした。「地域の高齢者の方と昔遊びをする中でどうしたら喜んでもらえるかな。」「分かりやすく説明できるかな」など相手目線で考える姿が数多く見られ、学びの深まりを感じました。



学校運営協議会で提案する子供たち



企画を練る子供たち

1月22日（木）いよいよ高齢者との交流会です。1月で一番の冷え込んだ日にもかかわらず、小野公民館に9名の方々に来ていただきました。子供たちは、最初は緊張していましたが、高齢者との会話がはずむに連れ、「福笑い」や「達磨落とし」などの昔遊びを楽しむ姿から見られました。あっという間の2時間でした。子供たちからは、「自分たち以上に遊びを何でも知っていた」「また、交流して遊びたい」などの感想が出されました。



今回の企画は、地域の方への相談から実行までが非常に短かったのですが、各地域の区長さんを始め、多くの地域の方に支えられながら実行に移すことができました。清里校区のネットワーク、フットワーク、チームワークの凄さを改めて感じたところでした。大変お世話になりました。